

令和元年6月26日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02375

研究課題名(和文)『源氏物語』周辺文化の形成に関する研究

研究課題名(英文) the study on the formation of the surrounding culture of 'The Tale of Genji'

研究代表者

新美 哲彦(NIIMI, Akihiko)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：90390492

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究、(2)近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究、(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究という3項目を柱とする。このうち(1)については、戦国期の女性古典学者である花屋玉栄関連の『源氏物語』古注釈書を、数人の研究者と協力の上、翻刻・出版する予定で、すでに一通りの翻刻を終え、翻刻確認と解題執筆を行っている最中である。また、(2)については、2回の国際学会発表を行った。また、俗語訳『源氏物語』に関する研究書を公刊する予定である。(3)に関しては、展示を企画し、パンフレットを作成した。さらに、2回の学会発表と2本の論文を公刊した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、『源氏物語』周辺文化の形成に大きく重点を置いた研究である。花屋玉栄の研究により、戦国期の女性による『源氏物語』受容が掘り起こされよう。また、俗語訳『源氏物語』の研究は、近世において『源氏物語』文化がいかんにか形成されていくかを知る貴重な研究である。さらに、中世王朝物語の研究は、王朝物語がどのように生き残っていくかを知る上で重要である。このように『源氏物語』周辺文化の形成を研究することで、「古典」として研究されることの多い『源氏物語』が、実は、時代によって大きく揺らぐ存在であり、『源氏物語』注釈書や周辺作品の価値も時代によって変遷することの具体的な様相が明らかになったかと思われる。

研究成果の概要(英文)：The main points of this research are the following 3 items: (1) Research on the text of 'The Tale of Genji' and ancient commentaries, (2) Research on the vernacular translation of 'The Tale of Genji' in the early-modern times, and (3) Research on the surrounding works of 'The Tale of Genji'.

As for (1), an old commentary on 'The Tale of Genji' written by Gyokuei KAOKU, a female classical scholar in the Sengoku period, is scheduled to be reprinted and published in cooperation with several researchers, and the complete reprint has already been completed, and the confirmation of the reprint and the writing of an annotated edition are in progress. With regard to (2), two presentations were made at international conferences. I will also publish a study on the vernacular translation of 'The Tale of Genji'. As for (3), we planned an exhibition and made a pamphlet. I also published two academic presentations and two papers.

研究分野：日本古典文学

キーワード：源氏物語 古注釈 俗語訳 中世王朝物語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究は、(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究、(2)近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究、(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究という3項目を柱とした研究である。研究開始当初の学術的背景について以下に述べる。

(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究

池田亀鑑『源氏物語大成』(1956)以降、主要注釈書の底本となってきた大島本は、基幹十九帖とそれを補写した帖に分かれることが判明した(佐々木孝浩「大島本源氏物語」に関する書誌学的考察」『斯道文庫論集』41(2007)ことで、価値のみが急落している。しかし巻末付載『奥入』本文は、定家臨模本と呼ばれる明融本と重なり、その由来が目目される(拙稿「大島本と明融本の比較から見えるもの」『源氏物語 本文研究の可能性』(和泉書院), 2015)。今一度、大島本巻末付載『奥入』および物語本文の再検討を行うべきであろう。明融本も、東海大学蔵の九帖と実践女子大学蔵の四十四帖に分かれるが、それらの差異、物語本文の特徴についてはさほど検討されていない。大島本・明融本の再検討から、定家本『源氏物語』の新たな一歩が踏み出されるのではないだろうか。

また、『源氏物語』古注釈は上記のように『源氏物語』本文の変遷とも密接に関わる。加えて、『源氏物語』が成立時から現代に至るまでに、どのような人たちに、どのような場面で受容されて来たかを具体的に知る、重要な資料である。だが、作成した人物周辺の文化圏および人間関係についても詳細が知られていないことが多い。例えば、女性の享受者・古注釈作成者として注目される花屋玉栄は、近世の資料によって近衛家の娘であるらしいと知られるのみで、どのような人物かは不明である。そのような女性の享受を示す古注釈を研究していくことで、中世における『源氏物語』享受の側面が具体的に明らかとなることが期待される。

(2)近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究

近世における『源氏物語』受容は、多くは写本で伝えられてきた古注釈書や、近世の『修紫田舎源氏』など特定の有名作品においてのみ考察が重ねられてきた。しかし、近世に受容された本の多くは版本であり、版本における『源氏物語』文化を除いて考察を進めても、近世の受容の実態、特に庶民の受容の実態を知ることはできない。

そのうち、刊行された俗語訳『源氏物語』としては、『風流源氏物語』や梅翁『源氏物語』、『紫文蚕之轉』などが挙げられるが、研究も翻刻もほとんどされていない。俗語訳『源氏物語』の中でも、特に梅翁『源氏物語』は、浮世絵に多くの新技法を導入した浮世絵師・奥村政信が本文も挿絵も描くことで注目される。このような作品を研究・考察することにより、近世における新たな『源氏物語』享受史が見えてくるのではないだろうか。

(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究

『源氏物語』周辺作品のうち、前田家本『枕草子』を中心に研究を行う。『枕草子』は、『源氏物語』同様、女性の教育装置としての役割も果たしており、『源氏物語』とは異なる形で、女性の古典享受における中心的作品である。諸本は三巻本、能因本、前田家本、堺本の四系統に分類されており、そのうち前田家本『枕草子』は鎌倉期の書写で、諸本の中で格段の古さを有するものの、堺本と能因本の合成本文とされている。そのため顧みられることが少なかったが、鎌倉期において熱心な編集作業をしている点、『源氏物語』とは異なる古典享受の一環として興味深い。

2. 研究の目的

本研究は、(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究、(2)近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究、(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究という3項目を柱とする。以下に、研究開始当初の目的を記す。

(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究

定家本『源氏物語』のうち、最善本と評価されてきた大島本・明融本の再検討を行う。まず大島本に関しては、大島本と明融本との比較により、補写された帖の本文は、正徹本など室町期写本からの影響が強いことなどいくつかの興味深い事実が判明した(前掲拙稿「大島本と明融本の比較から見えるもの」)。その事実を軸に、他の巻末付載『奥入』が、どのような系統の『奥入』であるのかについての考察を行い、さらに『奥入』が付されている巻の物語本文の特質について調査を行う。

また、戦国時代の近衛家の女性である慶福院花屋玉栄が作成し、もしくは書写に関わった注釈書である『花屋抄』・『玉栄集』・専修大学蔵蜂須賀家旧蔵『源氏物語のおこり』を取り上げる。

『花屋抄』・『玉栄集』は女性による『源氏物語』注釈書ということで注目されるものの、諸本関係も未整理であり、それぞれ翻刻はあるものの、善本の翻刻とは言い難い。『花屋抄』・『玉栄集』の諸本を整理し、詳細が知られていない花屋玉栄の生涯を調査することで、中世における女性の古典享受の実態が明らかになる。また専修大学蔵蜂須賀家旧蔵『源氏物語のおこり』は、花屋玉栄が「ちやあ」という女性に与えたものを豊臣秀吉が書写したものだが、その形成過程は興味深く(拙稿「花屋玉栄と「ちやあ」」『平安文学の古注釈と受容』第二集(2009))、さらに考察を深めることで、権力者による『源氏物語』享受の新たな一面が明らかになる。

(2)近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究

俗語訳され、刊行された『源氏物語』のうち、『風流源氏物語』と梅翁『源氏物語』については現在、翻刻と論文を併載した学術書出版の計画が進行中である。また、『紫文蚕之轉』の挿絵の

分析（発表「**The reception of Genji monogatari as seen through the illustrations for Nise Murasaki inaka Genji**」2014）梅翁『源氏物語』に見られる浮世絵師・奥村政信の挿絵の分析（招待講演「近世における『源氏物語』」早稲田大学国語教育学会春季例会，2015）に着手しており、『紫文蚕之囀』や奥村政信の挿絵の特異性が浮上しつつある。さらに考察を加えた上で論文化する予定である。

（3）『源氏物語』周辺作品に関する研究

『枕草子』は諸本により本文が相当異なるが、今回研究対象とする前田家本は類纂本で、堺本と能因本をつなぎ合わせた本文であるとされる。そのため、『枕草子』諸本の中でもっとも古い鎌倉期書写であるにも関わらず、従来ほとんど顧みられてこなかった。本研究では、前田家本の正確な翻刻、注釈、訳を付した注釈書を刊行し、鎌倉時代に享受・編纂された『枕草子』としての前田家本についての考察を深めることを目的とする。前田家本を詳細に検討することで、三巻本の本文のみによって研究されている『枕草子』研究に刺戟を与え、さらに『源氏物語』を含めた古典享受の実態についての研究も進むこととなろう。

3. 研究の方法

本研究は、『源氏物語』本文および古注釈書、周辺作品を対象とし、主として、書誌学・文献学的操作と史料調査を通して、中世から近世にかけての『源氏物語』本文の流通状況や、古典受容の実態を具体的に記述しようと試みるものである。つまり、中世から近世にかけての『源氏物語』周辺文化の形成を一次資料によって解明することを目的とする。

本研究は、下記の3点のテーマを核として進める。

- （1）『源氏物語』本文と古注釈に関する研究
 - （2）近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究
 - （3）『源氏物語』周辺作品に関する研究
- 具体的な研究計画は下記の通りである。

平成28年度

（1）『源氏物語』本文と古注釈に関する研究

定家本『源氏物語』のうちまず、すでに着手している、最善本と評価されてきた大島本・明融本の再検討を行う。大島本の巻末付載『奥入』は、さまざまな系統の『奥入』が混じっているようであり、本文も別冊単行の『奥入』とは異なることが多い。この巻末付載『奥入』を詳細に検討する。『源氏物語』巻末に『奥入』が付載されていると報告される諸本は、現在、20点に満たない。平成28年度においては、日本古典籍総合目録データベースに掲載される350点余のうち、国文学研究資料館でマイクロフィルムによる調査が可能な諸本の調査を行う予定である。

また、明融本は、東海大学と実践女子大学に分蔵されるが、東海大学桃園文庫所蔵の九帖のうち、定家の筆を模したとされ、『奥入』を付載する八帖は、実践女子大学蔵伝明融等筆本と比較すると紙質その他書誌的な特徴を異にする。その差異や、巻末付載『奥入』の有無についての調査と分析を試みる。

（2）近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究

近世に刊行された俗語訳『源氏物語』のうち、『風流源氏物語』と梅翁『源氏物語』については現在、翻刻と論文を併載した学術書出版の計画が進行中である。翻刻協力者の補助を得て、翻刻を行い、浮世絵師奥村政信の描く『源氏物語』の世界を考察し、前後の『源氏物語』の絵画化と比較した上で、論文化を試みる。

（3）『源氏物語』周辺作品に関する研究

『枕草子』の、現在刊行される注釈書のほとんどは三巻本系統の本文を底本としているが、四系統の先後関係については諸説あり、他系統と異同の多い箇所も多い。また、江戸時代の注釈書はすべて能因本に拠っており、『源氏物語』古注釈書に引用される『枕草子』には堺本系統かと判断される表現も見られる。これらの複数の『枕草子』は、どの系統の本文が『枕草子』の原典に近いか、ということではなく、それぞれが、それぞれの時代や流布環境において、女性の教育装置としての役割を果たしているように思われる。

4系統に分類される『枕草子』という作品群のうち、鎌倉時代に書写・編纂された前田家本について、誰が何のために編纂し、どのように読まれてきたのかを考察する。前田家尊経閣文庫への調査も併せて行い、成果を順次、注釈書の形で刊行する予定である。具体的には、平成29年度以降に着手予定である。

また『源氏物語』古注釈に関する研究会へ参加することで、『源氏物語』古注釈に関する見聞を広めるとともに、翻刻が公刊されていない他の未翻刻資料の翻刻にも、他の研究者とともに取り組み、順次公表する予定である。同時に諸研究機関に赴き、原資料の調査を行い、さらに膨大な量のマイクロフィルムを蔵する国文学研究資料館に定期的に調査に行くことで、さまざまな情報を得たいと考えている。

平成29年度以降の計画

平成 29 年度以降も、原則として平成 28 年度の計画を踏襲し、調査を継続するが、(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究として、さらに、戦国時代の近衛家の女性である慶福院花屋玉栄の調査を行う。花屋玉栄については、『花屋抄』・『玉栄集』の諸本調査および翻刻を進め、公刊する計画が進行中である。

(2) 近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究については、『風流源氏物語』や梅翁『源氏物語』の考察を終えた後に、『紫文蚕之轉』の挿絵の分析を試みる予定である。

また、(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究を平成 29 年度以降に着手する予定である。

4. 研究成果

(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究

(2) 近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究

(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究

それぞれの成果を以下に述べる。

(1)『源氏物語』本文と古注釈に関する研究

(1)については、戦国期の女性古典学者である花屋玉栄関連の『源氏物語』古注釈書を、数人の研究者と協力の上、翻刻・出版する予定で、すでに一通りの翻刻を終え、翻刻確認と解題執筆を行っている最中である。

また、定家本『源氏物語』の主要伝本である大島本と明融本を比較することで、大島本・明融本の問題点を洗い出し、考察した論を「大島本『源氏物語』と東海大学蔵伝明融筆『源氏物語』の比較から見えるもの」(『源氏物語 本文研究の可能性』和泉書院)として刊行予定である。また、2015 年の中古文学会秋季大会において、「室町戦国期の『源氏物語』本の流通・注の伝播」と題した、室町戦国期における『源氏物語』の流通や注釈の流布に関するシンポジウムにおいてコーディネーターをつとめたが、その趣旨説明を刊行した。

(2) 近世における『源氏物語』俗語訳に関する研究

『源氏物語』俗語訳については、2017 年 8 月にポルトガルのリスボンで開催された 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies において、梅翁『源氏物語』の挿絵と本文の関係について考察し、奥村政信の意図とチャレンジを解明した。また、2018 年 8 月にブラジルのカンピーナス大学で開催された第 12 回ブラジル日本研究国際学会・第 25 回全伯日本語・日本文学・日本文化学会において、近世の俗語訳『源氏物語』である『紫文蚕之轉』の挿絵と本文の関係について考察し、挿絵の特徴とともに、挿絵を描いた絵師について推定した。

同じく近世の俗語訳『源氏物語』である梅翁『源氏物語』および『風流源氏物語』の翻刻、注釈も終え、梅翁『源氏物語』の考察を含めた複数の近世『源氏物語』についての論文とともに近日、出版される予定である。

(3)『源氏物語』周辺作品に関する研究

2016 年 5 月に、平成 28 年度中古文学会春季大会記念展として、「文化装置としての『源氏物語』～九曜文庫を中心に～」を企画し、院生の協力のもと、パンフレットを作成した。これは修正を施した上で、早稲田大学図書館のリポジトリに登録された。

また、2017 年 5 月に中世文学会春季大会・シンポジウム「散文の中の和歌」のパネリストとして「中世王朝物語と和歌」と題し、中世王朝物語における和歌の役割について、数値面から考察し、その上で『我身にたどる姫君』の成立過程と成立時期、『恋路ゆかしき大将』の成立時期を考察した。その発表の一部を論文化し、「作り物語の和歌的表現 中世王朝物語を中心に」との題で『中世文学』第六十三号に掲載された。また、同発表の一部である『我が身にたどる姫君』の成立時期についても論文化を終え、『我が身にたどる姫君』の成立時期』として『国文学研究』第 188 集に掲載予定で、現在、校正段階にある。

さらに、2017 年には、成立当時から近世に至るまでの紫式部像の変遷について論じた「紫式部像の変遷 文の人のイメージ」を『日本「文」学史』第二冊(勉誠出版)内的一篇として公刊した。

5. 主な発表論文等

[雑誌論文](計 4 件)

新美哲彦、作り物語の和歌的表現 中世王朝物語を中心に、2018、『中世文学』第六十三号、pp.5-18、査読有

新美哲彦、紫式部像の変遷 文の人のイメージ、2017『日本「文」学史』第二冊、pp.110-125、査読無

新美哲彦、諸本分類の手法と可能性、2017、『書物から見る知のネットワーク』、pp.11-16、査読無

新美哲彦、シンポジウム「室町戦国期の『源氏物語』本の流通・注の伝播」趣旨説明、2016、『中古文学』第九十七号、pp.2-5、査読無

[学会発表](計 4 件)

新美哲彦、江戸時代の俗語訳『源氏物語』について～『紫文蚕之囀』を中心に～、第12回ブラジル日本研究国際学会・第25回全伯日本語・日本文学・日本文化学会、2018、査読有

新美哲彦、Text and Image in Baio's versions of *The Tale of Genji*, 15th International Conference of the European Association for Japanese Studies、2017、査読有

新美哲彦、中世王朝物語と和歌、中世文学会春季大会・シンポジウム「散文の中の和歌」、2017、査読無

新美哲彦、中世王朝物語と和歌、第48回古典研究会、2017、査読無

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：なし

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：なし

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。